

『竹取物語』と『斑竹姑娘』

西 田 禎 元

『源氏物語』「絵合」の巻に、「物語の出で来はじめの祖^(註1)」と紹介されている『竹取物語』(㊴)の、いわゆる〈求婚難題説話〉(T₂・T₃)の部分と、非常に似ている内容を含む民話の類いが、中国西南部の四川省阿壩藏族自治州などで採集され、1957年に上海の「少年儿童出版社」から、活字本の形で紹介された。長篇民話集『金玉鳳凰』の中の一話「斑竹姑娘」(㊵)がそれである。

㊵の体裁は、全文六千字程度の短篇であり、前後二つの部分(H₀・H₁とH₂・H₃)から成っている。

前半は、主人公格の〈朗巴〉と〈姑娘〉の

幼少年時代の物語で、それに対する後半は、二人が青年に成長してからの物語である。

前述の〈求婚難題説話〉(T₂・T₃)に相当するのは、後半の青年時代の物語(H₂・H₃)であるが(T₁)と(H₁)の共通点も見逃せない。

類似した〈求婚難題説話〉に関する比較検討については、後で詳しく述べることにして、先ず『竹取物語』と『斑竹姑娘』の、全体的な比較検討をしてみよう。

二

両者の構成を表示すると、以下のとおりである。

『竹 取 物 語 』 ㊴	『 斑 竹 姑 娘 』 ㊵
	<p>H。 楠竹物語</p> <p>金沙江の南に、楠竹を大切に育てる老母と息子〈朗巴〉がいた。息子の背丈より伸びない一本の楠竹が、母子の涙の滴で〈斑竹〉になる。</p> <p>土司の横暴から、斑竹を守る。(註2) ㊵英雄説話</p>

<p>T₁ かぐや姫の生い立ち</p> <p>竹筒の中から、可愛い女の子が出現。(㉔化生説話)</p> <p>三箇月ほどで成人する。(㉕異常成長説話)</p> <p>「なよ竹のかぐや姫」と名づけられる。</p> <p>家は光に満ち、「竹取の翁」は富豪になった。</p> <p>(㉖報恩説話, ㉗致富長者説話)</p>	<p>H₁ 姑娘の生い立ち</p> <p>斑竹の筒の中から、可愛い女の子が出現。</p> <p>(㉔化生説話)</p> <p>風に当たりぐんぐん大きくなる。(㉕異常成長説話)</p> <p>「斑竹姑娘」と名づけられる。</p>
<p>T₂ 貴公子たちの求婚</p> <p>色好みの代表者たる五人の貴公子たちの求婚。</p> <p>(㉘求婚説話)</p> <p>〈翁〉は〈かぐや姫〉に結婚を勧めるが、結婚の意志なきことを告げられる。</p>	<p>H₂ 若者たちの求婚</p> <p>学問もせず遊び呆ける金持ちや権勢家の息子たち五人の求婚。</p> <p>(㉘求婚説話)</p> <p>母は〈朗巴〉と〈姑娘〉との結婚を願望し、「三年後」との快諾を得る。</p>
<p>T₃ 五つの難題 (㉙難題婿説話)</p> <p>(1) 石作の皇子 (人物)</p> <p>仏の御石の鉢 (難題)</p> <p>皇族 (身分)</p> <p>策略家 (紹介)</p> <p>近くの寺にあった偽物の鉢を持参。(経過)</p> <p>偽物と見破られ、無視されて帰宅。(結果)</p> <p>皇子, 姫, 皇子 (和歌)</p>	<p>H₃ 五つの難題 (㉙難題婿説話)</p> <p>①土司の息子 (人物)</p> <p>撞いても割れない金の鐘 (難題)</p> <p>地方のボスの息子 (身分)</p> <p>権勢家, 不精者 (紹介)</p> <p>山廟にあった銅の鐘に金メッキをした偽物を持参。(経過)</p> <p>偽物と見破られ、恥じて逃げる。(結果)</p>
<p>(2) 庫持の皇子 (人物)</p> <p>蓬萊の珠の枝 (難題)</p> <p>皇族 (身分)</p> <p>謀略家 (紹介)</p> <p>鍛冶工匠に偽物を作らせて持参。翁は本物と思う。(経過)</p> <p>鍛冶工匠たちに賃金の未払いを申し出られ、後に彼らを打擲し、深山に隠れる。(結果)</p> <p>皇子, 翁, 皇子, 姫 (和歌)</p>	<p>②商人の息子 (人物)</p> <p>打ってもこわれない玉樹 (難題)</p> <p>金持ちの息子 (身分)</p> <p>労苦を厭う欺瞞家 (紹介)</p> <p>漢人の工匠に偽物を作らせて持参。(経過)</p> <p>工匠たちに賃金の未払いを迫られ、連れ去られる。(結果)</p>

<p>(3) 阿部御主人 (人物)</p> <p>唐土にある火鼠の皮衣 (難題)</p> <p>右大臣 (身分)</p> <p>資産家、一族が栄えている (紹介)</p> <p>唐人の王慶なる者から、大金を払って購入し持参、翁も姫も結婚を期待。(経過)</p> <p>火に燃えて灰になる。右大臣願色を失くして帰る。(結果)</p> <p>大臣、姫 (和歌)</p>	<p>③役人の息子 (人物)</p> <p>燃えない火鼠の皮衣 (難題)</p> <p>部下が多い役人の息子 (身分)</p> <p>話が得意 (紹介)</p> <p>チベットから四川省、更には北京まで探し求めた後、松潘(四川省)の雪山にある古廟で見つけた〈深紅の鼠の皮衣〉を持参。(経過)</p> <p>火に燃えて灰になる。息子しおれて馬で逃げる。(結果)</p>
<p>(4) 大伴御行 (人物)</p> <p>龍の頸の五色の珠 (難題)</p> <p>大納言 (身分)</p> <p>権威主義者、尊大な反面小心者 (紹介)</p> <p>家臣たちに財産を与え、珠を取りにやらせるが、家臣たちは、財産を受け取った後、家に隠れたり、気ままな旅をする。大納言自ら船出し、台風のため「明石の浜」にうちあげられる。(経過)</p> <p>手輿に担われて帰宅。(結果)</p> <p>ナシ (和歌)</p>	<p>⑤臆病ではら吹き若者 (人物)</p> <p>海龍の額の分水珠 (難題)</p> <p>刀槍所有者で牧畜業を営む金持ち (身分)</p> <p>臆病で労苦を厭う (紹介)</p> <p>人を雇い、金銀や刀槍を与え、珠を取りにやらせるが、その者たちは、金銀刀槍を受け取ると、父母妻子を連れて逃亡する。若者は自ら船出し、台風のため南海の孤島の浜にうちあげられる。(経過)</p> <p>孤島で流浪の日々をおくる。(結果)</p>
<p>(5) 石上麻呂足 (人物)</p> <p>燕の子安貝 (難題)</p> <p>中納言 (身分)</p> <p>温厚篤実 (紹介)</p> <p>家臣や大炊寮の役人の協力で、しかるべき巢の存在を知らされる。(経過)</p> <p>家臣の不注意で綱が切れ、籠に乗ったまま落下。その後、病床に臥し死去。(結果)</p> <p>姫、中納言 (和歌)</p>	<p>④傲慢な若者 (人物)</p> <p>燕の巢にある金の卵 (難題)</p> <p>多くの部下がいる若者 (身分)</p> <p>才能を自負 (紹介)</p> <p>無数の巢や卵を叩き壊す。山上の摩天楼にあるという偽の情報をつかまされる。(経過)</p> <p>攻撃してきた燕を捕えようとして桶から投げ出され即死。(結果)</p>
<p>T. 狩の行幸</p> <p>帝、翁の家に行幸、かぐや姫と歌を贈答 (㉔)</p>	<p>H. 朗巴と姑娘の結婚 (㉕婚姻説話)</p>

相聞説話) 〈和歌〉帝、姫	
T。 天の羽衣 中秋の満月の夜、かぐや姫天上に帰る (①昇天説話)	
T。 富士の煙 帝は、かぐや姫から献上された〈不死の薬〉を、たくさんのつわものに託し、日本一高い山の頂上で燃やす。「たくさん(富)のつわもの(土)がのぼった山」、すなわち〈富士山〉である。(①地名起源説話)	

三

この表からも明らかなように、〈求婚難題説話〉の部分をはさんで、『竹取物語』は〈その後の話〉が長く、『斑竹姑娘』は〈その前の話〉が長い。

こうした構成の違いは、作品の構想や主題の違いをも示している。

①の方は、〈相聞説話〉(㉔)、〈昇天説話〉(①)、〈地名起源説話〉(①)と続く、重要な構想が組み込まれている。

また、㉔の方は、これらに対応する部分が全くないといった状態で、わずかに(H₄)に示した〈婚姻説話〉(㉔)の構想である、

斑竹姑娘呢、和朗巴成了夫妻(斑竹姑娘は、朗巴と夫婦になった)〈165^(註3)べ〉の一文だけが、民話全体の結びの文として記されている。

したがって、①が、㉔、㉔、㉔、㉔、㉔、①、㉔、①、①など多くの構想から組み立て

られている中篇の物語であるのに対し、㉔は、㉔の〈英雄譚〉と、㉔、㉔、㉔、①、㉔など幾つかの構想を盛り込んだ短篇の民話であるといえる。

そしてまた、従来から指摘されているように、①は、〈求婚難題説話〉の現実的内容と、〈化生説話〉や〈昇天説話〉の伝奇的・浪漫的内容の二つの様式から成っており、㉔は、(H₀・H₁)の少年時代の〈楠竹物語〉と、(H₂・H₃)の青年時代の〈求婚難題物語〉の二段から成っていることが理解されよう。

①と㉔は、㉔、㉔、㉔、①という類似の構想を共有しながらも、①と㉔に代表されるような全く違った構想も見られ、全体の主題は、明らかに相異している。

四

主題については後述することにして、先ず『竹取物語』と『斑竹姑娘』の類似の部分である、㉔、㉔、㉔、①の構想について検討し

てみよう。

①と④の共通点は、ヒロインの〈かぐや姫〉と〈斑竹姑娘〉のどちらも、竹筒の中に居たということである。

①三寸ばかりなる人、いとうつくしうて居たり〈14ペ〉

④有一個漂亮的女孩（美しい女の赤ん坊がいた）〈151ペ〉

異なっている面は、その後の成長過程において、

①三月ばかりなるほどに、よき程なる人になりぬれば〈16ペ〉

と記され、

④那女孩見風直長（その女の子は風に当たるとぐんぐん大きくなり）〈151ペ〉

と記されている部分である。

が、いずれにしても、〈異常成長説話〉の構想であることに違いはない。

④・⑥と⑥・①を結ぶ間の話には、相異が見られる。

①には、姫を見つけ育てた〈竹取の翁〉が、姫の存在ゆえに心みたされたり、また生活が豊かになっていくという、〈報恩説話〉と〈致富長者説話〉の構想が付加されているのに対して、④には、これら二つの構想は見られず、労働を介しての老母と朗巴と姑娘の三人による楽しい生活が展開されるという、一種の〈至福説話〉が語られているに過ぎない。

五

それでは次に、⑥・①の〈求婚難題説話〉の部分における、『竹取物語』と『斑竹姑娘』の類似と相異の面を見てみよう。

前掲の表からも明らかなように、⑥・①の

部分は、非常に似ているのであるが、それでも幾つかの異なった面が見られる。

初めに⑥における類似の面を指摘すると、五人の有力な求婚者の存在ということである。これについては、①において詳細に語られる。

相異の面は、〈翁〉と〈老母〉が同じく結婚を願っているにしても、前者は求婚者の誰かとの婚姻であり、後者は我が子〈朗巴〉との婚姻である。

ということは、〈翁〉と〈老母〉の配役は同様でないということでもある。前者は〈かぐや姫〉の発見者であり後見人である。後者は〈姑娘〉の発見者でもないし、後見人の位置としても弱い。

〈翁〉の位置に相当するのは、むしろ〈朗巴〉である。昇天する宿命の〈姫〉は、〈翁〉と結婚するわけにはいかず、〈朗巴〉と結婚する宿命の〈娘〉は、昇天するわけにはいかない。

〈羽衣伝説〉とか〈天人女房譚〉の構想からいえば、①が全篇完結に近い形であるのに対し、④は前篇（地上での婚姻）でとどまっている形である。

①の〈難題説話〉の部分の類似点はたくさんある。

(1)求婚者（難題）の数が五人（五つ）

(2)求婚者が三人から五人になったらしいこと

この問題を、求婚者の紹介の記述から検討してみよう。

①「石作の皇子には、（中略）賜へ」と言ふ。〈24ペ〉

②「庫持の皇子には、（中略）賜はらむ」と言ふ。〈同前〉

- ③「いま一人には、(中略)賜へ。大伴の大納言には、(中略)賜へ。石上の中納言には、(中略)賜へ」と言ふ。〈同前〉
- ④石作の皇子は、心の支度ある人にて、
〈26 ペ〉
- ⑤庫持の皇子は、心たばかりある人にて、
〈28 ペ〉
- ⑥右大臣阿部御主人は、財豊かに、家広き人にておはしけり。〈42 ペ〉
- ⑦大伴御行の大納言は、(中略)のたまはく、〈50 ペ〉
- ⑧中納言石上麻呂足、(中略)のたまふを、〈60 ペ〉
- ⑨土司的兒子(土司の息子)〈152 ペ〉
- ⑩商人的兒子(商人の息子)〈同前〉
- ⑪官家的兒子(役人の息子)〈同前〉
- ⑫驕傲自大的少年(傲慢で尊大な若者)〈同前〉
- ⑬胆小而又喜歡吹牛的少年(胆っ玉が小さいのにほら吹きが好きな若者)〈同前〉
- ⑭の場合、五人の求婚者のうち、先の二人は固有名詞で紹介され、三人目は「いま一人」といった最後の人物を暗示するような記述であるのに加え、四人目・五人目の二人もまとめて紹介されていることがわかる。

また、前者三人が、④～⑥のように、その性格などが紹介されているのに対し、後者二人は、いきなり、部下たちに指示をしている状況が記述されている。

⑭の場合も、⑨～⑪のように、前者三人が「……の息子」と出自が明らかにされているのに対し、後者二人は、⑫、⑬のように、性格が紹介されている。

①も⑭も、前者三人と後者二人の区別は明

らかである。

更に、前者と後者の扱い方の相異点は、難題の応じ方の違いにも見られる。

前者三人は、偽物なりとも、一応品物を持参した。後者二人は、偽物すら持参することができなかった。

『今昔物語集』巻第31—第33話「竹取翁、見付ケシ女ノ児ヲ養ヘル語」の求婚者は三人である。

また、中国福建省に伝わる〈月姫説話〉の求婚者も三人である。^(註5)

(3)難題の内容が似ている

鉢と鐘、珠の枝と玉樹、火鼠の皮衣(同じ)、龍の頸の珠と海龍の額の珠、燕の子安貝と燕の金の卵

(4)失敗譚の類似

偽物を見破られ、恥じて逃げ去ったり、怪我をしたり、死んでしまう

六

それでは次に、相異点を検討してみよう。一つは構成の問題である。

表にも示したように、四番目と五番目の内容が逆になっている。

『竹取物語』の方は、求婚者の身分が、皇子から大臣、大納言、中納言と順次下がり、また話の結果も、前者三人が逃げ去り、次が遭難、最後が怪我の末死去というように、次第に悲惨の度合が深まっており、構成としては妥当な展開といえよう。

これに対して『斑竹姑娘』の方は、前者三人の出自は、土司、商人、役人の違いはあっても、それぞれの方面(政界、財界、官界)の権力者の息子である。三話の構成は妥当な

展開である。

後者二人の失敗談は、それぞれの性格（傲慢であったり、臆病であったり）が強く反映したところに成り立っている。一人は傲慢の故に、燕を迫害し復讐され死に、もう一人は臆病の故に、帰国できないで永遠にさすらう。

結果から見ると、〈無期懲役〉、〈死刑〉の順が自然なのであるが、求婚者の人となりという面から見ると、④の若者は、①～③の求婚者に近く、⑤の若者は、①の中納言に通う面さえある。

次は人物像の問題である。

①の五人も、④の五人も、基本的には、〈かぐや姫〉や〈姑娘〉にとって、願わしくない人物である。前者は結婚できない天上の女性であるし、後者は婚約者が存在する女性である。

したがって、これらの求婚者はすべて、好ましくない人物としての設定が要請される。

同時に、難題は解決できないという不可能性が前提になっている。

彼らが持参すべき品物は、存在しない物なのである。

①には、すでにその事は暗示されていた。

(ア)難きことにこそあなれ。この国にある物にもあらず〈24 ぺ〉

とか、

(イ)世の中に見えぬ皮衣のさまなれば〈46 ぺ〉

とか、

(ウ)この国になき、天竺・唐土の物にもあらず〈50 ぺ〉

と記されている。

(イ)にしても、(ウ)にしても、当時の世界

観からすれば、世界中のどこにもない、地球上には存在しないという意味合である。

また、④には、次のように語られていた。

他們，沒有一個能够取宝来的（彼らは唯一人として宝を取って来られる者はいません）〈156 ぺ〉

①も④も、両者の〈求婚難題説話〉は、すべてが失敗に終わり、婚姻には至らないという、相聞性の面では不毛の物語なのである。

ここには、人間的な真情は通い合わないのである。〈善〉・〈悪〉の図式でいえば、求婚者は〈悪〉であり、ヒロインは〈善〉なのである。

十人の悪人の中で唯一人同情に値すべき人物は、①第五の求婚者〈石上麻呂足〉である。

彼に相応する④の求婚者〈傲慢な若者〉は、全求婚者の中で最も悪い人物ではなからうか。

他の九人は、恥じ知らず、愚かではあっても、殺生の罪を犯してはいない。

搗毀了無數燕窩，打破了很多燕蛋（無數の燕の巣を叩き壊し、たくさんの卵を割る）〈161 ぺ〉

という記述や、

雄燕被他捉到手裏掐死了（雄燕は彼に掴みとられ、ひねり殺された）〈163 ぺ〉

という記述からは、この若者の酷薄さは否定できない。

〈かぐや姫〉から唯一人「あはれ」〈68 ぺ〉と同情された〈麻呂足〉とは、あまりにも対照的な〈驕傲自大的少年（傲慢な若者）〉のありようといえる。

次の相異点は、二番目の難題譚の結末である。

①も④も、偽物の品を工匠に作らせて持参

した話であり、工匠たちの直訴により失敗したという経緯は同じであるが、その後の求婚者と工匠たちのかかわりが違っている。

①には次のように記されている。

道にて、庫持の皇子、血の流るるまで打ぜさせ給ふ。祿得し甲斐もなく、みな取り捨てさせ給ひてければ、逃げ失せにけり〈40 ぺ〉

直訴した工匠たちが帰る途中に、庫持の皇子は、血の流れるまで工匠たちを打擲したので、工匠たちは、〈姫〉からの褒美も取り捨てられ、逃げ帰ったのである。

④には次のように記されている。

商人的兒子（中略）就想上馬逃走，被那幾個漢人工匠拉着手，把玉樹打碎，然後扭着走了（商人の息子は、すぐさま馬で逃げようとしたが、漢人の工匠たちに手を取られ、玉樹は叩き潰されて連れ去られた）〈159 ぺ〉

①の場合は、皇子が工匠たちを懲らしめたが、④の場合は、商人の息子が、工匠たちに拉致される。おそらく懲らしめられるであろう。

この結末の部分だけは、主客が転倒している。名誉を失っても皇子は依然として権力者であるが、金銭に関する信頼を失ったという商人の息子の権威は、地に落ちたのである。

更にまた、①の工匠たちは、皇子から支払って貰えなかった賃金を、「この御屋より賜はらむ」〈38 ぺ〉とか、「賜はるべきなり」〈同前〉と、〈かぐや姫〉のもとから支払って貰おうと考えている。

こうした工匠たちのありようは、皇子の欺瞞性を白日のもとにさらした功勞者である

「嬉しき人ども」〈40 ぺ〉ではあったにしても、永遠なるものを志向する物語作者からは、その俗物性は指摘されなければなるまい。

技術の粋を集めて求めに応じた、漢民族としてのプライドとメンツを傷つけられた工匠たちとの比ではない。

七

『竹取物語』と『斑竹姑娘』、両者の主題について検討し、この稿の結びとしたい。

前にも少し触れたように、作品全体の形態は違っている。前者は、〈かぐや姫〉の地上への出現から、天上への帰還といった、〈羽衣説話〉を根幹にしているのに対し、後者は、〈朗巴〉と〈姑娘〉の、英雄譚と相聞譚が根幹であり、前者が伝奇的・浪漫的な物語であるのに対し、後者は写實的・現實的な説話である。

ここでは、共通性に富んだ、類似の伝承によるとと思われる、〈求婚難題説話〉の部分に限って、両者の主題を考えてみたい。

結論を先に述べると、両者の主題は、〈求婚→難題→不成立〉という面で全く同じである。

しかし、このこと自体が主題である筈がない。何故なら、これらは、求婚者たちの物語なのである。

①は〈かぐや姫〉の話であり、④は〈朗巴〉と〈姑娘〉の話でなければならない。

したがって、〈求婚難題説話〉の背景にある、〈不成立〉の意義を考えてみなければならないのである。

この問題についても、すでに触れたところである。①の場合は、〈姫〉が天上の人であ

るが故に、㊦の場合は、〈娘〉が婚約者を決めている故に、両者ともヒロインに結びつかない求婚説話でしかないのである。

相聞性を伴わない求婚譚は不毛である。

結局、㊦においては、〈かぐや姫〉の永遠の美しさを、㊦においては、〈朗巴〉と〈姑娘〉の純愛の美しさを、より意味のあるものにする、〈求婚難題説話〉なのである。

【注】

〈注1〉 『源氏物語』二（日本古典文学大系）179ペ

〈注2〉 H。の「楠竹物語」の部分を、「人民英雄譚」と推定する岡村繁氏の論考がある（「中国文学と王朝物語——『斑竹姑娘』と『竹取物語』との関係——」〈『中古文学と漢文学Ⅱ』——和漢比較文学叢書4——〉）。

〈注3〉 本文および訳文の引用は、『竹取物語』（全対訳 日本古典新書）によった。

〈注4〉 南波浩氏、「竹取物語の創造性とその本質」（日本古典全書『竹取物語』解説）

〈注5〉 寺尾善雄氏、『中国故事物語』